

渤海との交渉についての一考察

松 好 貞 夫

I 考察の意義と対象

上代の日本民族が、その勢力を東北方に進出する過程で、原住民たち(アイヌ民族であろう)が、「みしはせ肅慎」と称する一見正体のさだかでない異民族と、交換の最も原始的な形態である沈黙交易を行う情景に接したことが、古典の語りに伝えられている。古代史研究の現段階では、いわゆる肅慎とは、その頃の北海道に蟠踞していた異種のアイヌ民族であったろうということに、見解がほぼ一致しているようである。しかしそうではなく、大陸からカラフトあたりにまで渡来したツングース (Tungus) 族の一種族だったのかも知れないとする別の説があって、いずれとも最終的な決め手のないのが、研究史の現情だといってよい。それらの事情について、私は東京都立大学経済学会の『経済と経済学』(第18・19合併号)に登載された拙稿「北方民族との接触・交渉〈日本に於ける交易の起原とその形態について〉」において、いささかその間の事情に触れておいた。実のところ私はかつて公刊された『北涯の悲劇』と題する小著で、近世カラフトのアイヌたちが大陸に渡り、黒竜江畔で大陸各地の異民族と物々交換を行って、それらの物資を日本(松前)に齎し、封建の権力者たちを大いに悦ばせたいきさつのあった事実を紹介したことである(昭和35年3月)。その頃私はこの事実に関連して、長崎一港を中国とオランダだけに解放していた鎖国の幕藩体制下で、アイヌ民族を媒体とする黒竜江交易が、大陸とのいわば裏街道を形成していたことに、ある種のおどろきを禁じえなかったのである。そしてそこに、歴史以前のギャップがあるにしても、かの肅慎と東北日本の原住民だったアイヌ民族との交渉

にも、ただ単に日本本土の北方と北海道というような近い地理的環境が条件だったのではなく歴史以前の民族が歴史以前から、文明社会の常識を超越する交渉を持っていたのではないか、アイヌ民族の黒竜江交易のごときも、しょせんは自然民族の底知れぬ悠遠な生存の経過を伝来するゆえんなのではないかと考えた。そこで古典の語りを手がかりにして、当面正体の知られていない肅慎の種族的な存在を大陸のどこかに探り出して、その後の歴史になにがしか跡づけることができないものか。実証的というよりも、むしろ思索的にこころみたのがこの稿なのである。歴史の研究としては邪道かも知れない。しかし渤海の原住民として、肅慎がその名を連ねていること、これは紛う方なき事実ではある。

いわゆる渤海とは、どのような国柄であったのか、668(天智7)年、唐と新羅の連合軍に首都平壤を奪われて滅亡した高句麗の靺鞨系の遺民大祚榮が、唐の勢力が満州方面から退潮するのに乗じて建てた「震国」、これがのちの渤海国である。713(和銅6)年、大祚榮は唐の皇帝から「渤海郡王」の冊封を与えられ(したがって日本との修好文書にも、当初のものには「渤海郡王」との肩書きが多い)、かくて927(延長5)年契丹(遼)に滅ぼされるまで、およそ215年ばかりの間存続したものである。『類聚国史』延暦15(796)年4月27日の条に、在唐学問僧永忠らの渤海国に関する所見を収めている。それによると、「渤海国は高麗(実は高句麗のこと、以下同じ——筆者注)の故地なり、大命開別(天智)天皇七年、高麗王高氏唐の為めに滅ぼさるる所なり、後天之真宗豊祖父(文武)天皇二年、大祚榮始めて渤海を建つ、和銅六年、唐冊を受けて其の国を立つ、延袤二千里、州・県・館・駅無く、処々に村里

有り、皆靺鞨部落にして、其の百姓は靺鞨多く、土人少し、皆土人を以て村長と為し、大村を都督と曰い、次ぎを刺史と曰い、其の下の百姓を皆な首領と曰う、土地極寒にして、水田に宜しからず、俗頗る書を知る云々」とみえる(後篇、348—49頁)。推してその国柄を知るべきであろう(注1)。もっともこの観察には、多分にわが律令的な見解があり、その「百姓」というのは、必らずしもその土地の土著民(natives)を指すのではなく、わが大化以前の国造、県主とかいった、むしろ地方的な豪族に類するものを指すのではないかと思う。でなければ意味が通じないのではなからうか。

(注1) 朝鮮半島のいわゆる三韓、馬韓・辰韓・弁韓のあとをうけて勃興した、わが上代の日本と関係の浅からぬ高句麗・百済・新羅の三国だったのはいうまでもない。そしてそれらの三国と日本が関係した外交上の内容には、具体的にそれぞれの相違があったが、それはとにかくとして、いまいうところの高句麗は、わが国では「高麗」と書き、「こま」または「こうらい」と呼んでいた(辻善之助『日本文化史』I, 104頁)。このため918(延喜18)年、王建(太祖)によって成立した統一王朝「高麗」と混同され易いことに注意しておかなければならない。

いわゆる靺鞨こそは、扶余とか挹婁とか当の肅慎とか、要するにツングース族を祖系とする諸種族を包括する新興の勢力であった。この点については、なおあとで関説するが、故衛藤利夫氏の説によると、それらの諸種族は、「その生活が極めて原始的で今日の言葉で云ふ国を建てると云ふところまでは行って居ないで、「始めて国の形らしいものをこゝに造ったものは扶余族」であり、それが実は靺鞨であった(同氏『靺鞨』昭和13年1月刊、のち31年3月同名の全集本、351頁)。かれらは遼河や松花江の上流、南満洲の肥沃な土地を占めて、農耕を主とする生活を営んでいたといわれており、高句麗の亡んだあとにできた渤海の版図が、すなわちそれであった。「今日の吉林省や間島あたりを中心に朝鮮の感

鏡北道、ソ連領の沿海州に跨って、新たに大きな国を建設した」と衛藤氏の説にみえる(同上、362頁)。

靺鞨(渤海)の首都を^{トシキン}東京城といい、牡丹江畔にあった。もっともそれは後代の俗称であって、正式には「上京竜泉府」と称した。衛藤氏はまたいう、「渤海はその国を創めるには、御多聞に洩れず、武力を以てし、所謂馬上天下を取ったのであるが、これを治むるには文を以てし、当時支那文化の爛熟期にあった唐朝の文物を多分に取入れ、東京城には、見るも眩ゆきばかりの宮殿が、薨を連ね軒を並べ、満洲における初めての燦然たる文化王国を建設したものである」と(同上、363頁)。僧永忠らの紹介とは大分ちがった印象を与えるが、衛藤氏の文には、修辭に多少の誇張があったのかも知れぬ。同氏もいわれているように、もともと狩猟民族を祖系とするかれらが、たやすく土著の農耕生活にはいっていったとは、必らずしも信じられない。渤海から日本にもたらす方物(土産)にしても、虎や豹や熊のごとき、狩猟民族にふさわしい野獣の毛皮類が多く、これに対し日本からは砂金や水銀の外に、庸・調の加工生産物を積み帰えるのが、ほとんどの例であった。両国の経済にそれだけの発展段階的な相違があったものとせざるをえない。ただし大祚榮に率いられた靺鞨人がすぐれた民族であって、肅慎や挹婁らの狩猟民族を支配し、その上に安座して国を建てたものだとなれば、ことは別である。それはあたかも平安朝の文化を導入して、僻遠不毛の奥州平泉に開花させた、かの藤原三代の栄華にも似て、未開の部族や種族を踏まえた独裁、専制の古代国家にありがちな、偏在的富のおどろくべき現実として認識されなければなるまい。そしてこの場合、問題は絢爛たる富の装飾的な形態にあるのではなく、それらの富を生み出す直接の生産者が、どのような階級的立場におかれていたかという点にあらう。肅慎や挹婁は案外その労働を、^{トシキン}華やかな東京文化の造成に吸収される階級者だったのかも知れない。日本と修交の過程にも、なんとなく富と貧とが形影相伴

うような割り切れぬ気配がうかがわれる。

さて渤海の使節が日本に來航したのは、聖武朝の神龜4(727)年12月を最初とし、それ以来延喜20(920)年の頃に至るまで、『類聚国史』が記載する単なる年・月まで勘定に入れると、前後40回に近いものがあり、別に衛藤利夫氏の調査によるとそれが35回、日本から派遣したのが、記録に残るだけでも17回に達するのであった(前掲書、373頁)。辻善之助氏の『日本文化史』には、神龜4年から延長8(930)年までおよそ200年の間に、來朝した渤海の使節が33回、日本から派遣したのが神龜5(728)年から弘仁2(811)年に至るおよそ80年間に13回と数えられている(I, 228—29頁)。もっとも渤海が滅亡したのは、わが延長5年のことである。辻博士が延長8年までといわれたのは、渤海の滅亡後に遺子の裴璆はいきうが「東丹国使」と称して來朝したのを、渤海国使の最後のものとみなされたからのことである。いずれにしても彼我の來往からすれば、彼からの來航がはるかに頻繁だったのは争えない。

II 待我の利害関係

渤海の使節が來朝する趣旨や目的は、時によって同じでなかった。しかものちになると、日本側で僻易して問題になるほど、それほどまでに終始かれからの一方的な働きかけであった。淳和朝の天長3(826)年3月1日、右大臣藤原緒嗣は、渤海国使の接待に意義がなく、いたずらに無駄ばかり多い実情を非難して、次のような奏言を提出している(原漢文)。

「(前略) 礼記に云う、夫れ礼は、親疎を定め、嫌疑を決し、同異を別かち、是非を明かにする所以なり、礼は費を辞せず、礼は節を踰えずと、而して渤海の客徒たる、既に詔旨を違え、濫りに以て入朝す、偏に拙信を容れ、恐くは旧典を損ず、実に是れ商旅にして、隣客とするに足らず、彼れ商旅を以て、客となし国を損ず、未だ治体を見ず、加以比日しかのみならずこのころ、雑務行事、一に贈皇后の改葬、二に御齊会、三に加勢山溝並に飛鳥堰溝を掘り、四に七道畿内の巡察使あり、五に渤海使を召す可んば、経営重疊して、騒動違あら

ず、又頃年旱疫かさな相仍り、人、物共に尽く、一度び賑給すれば、正税欠少し。況や復た時は農要に臨み、弊通送に多く、人差役に疲れ、税供給に損ず、夫れ君争臣無んば、安ぞ天下いずくんを存せん、民憂未だ息まず、天災滅し難し、一人の天下に非ず、是れ万人の天下なり、縦ほしいままに今民を損ずるがごとき、徳後賢に慙ずる有らん、伏して請らくは客徒の入京を停止し、即ち着国自り還却せしめ、且つは朝威を示し、且つは民苦を除き、唯期に依って入朝せしめ、須く古例を用んことを云々」(『類聚国史』後篇、357—58頁)。

言々句々、いかにも痛烈である。国費多端にして、民が苦役に疲れるのとき、「商旅」にすぎざる渤海の使節に対する応接の無益を強調して、その入京を拒み、到着せる所からただちに退去させるように奏言したものである。ただし、必らずしも絶対にかれらの入京を拒否せよと主張するのではなく、週期にしたがい、古例に準じて入京させよというのである。この点については、あとで触れるところがある。

渤海の使節が初めて來朝したのは、神龜4年の12月であった。『続日本紀』同年同月の記事によると、このとき渤海郡王は正使高仁義以下24人を派遣したのであったが、同年8月に蝦夷境(アイヌ民族の居住地付近であろう)の出羽国に漂着して、正使の仁義以下16人が殺害され、首領の高齊徳ら8人だけがわずかに死を免れて、月の20日に入京した。「渤海郡は旧高麗国なり、(近江)(天智) 淡海の朝廷七年冬十月、唐将李勣伐て高麗を滅す、其の後朝貢久く絶えぬ、是に至て渤海郡の王寧遠將軍高仁義等二十四人を遣して、朝聘せしむ」といい、すなわち高句麗の朝貢を継承するものと評価してかれらを迎えるのが、このときわが朝廷の態度であって、この考え方はその後もつづけられる。29日齊徳らに「衣服冠履」を賜うて待遇した(前篇、111頁)。

翌5(728)年正月17日、天皇中宮に御し、高齊徳ら渤海郡王武芸(武王)の啓(親書)並びに方物を上る。啓詞にいう、「武芸啓す、山河域を異ほのかにして、国土同じからず、延ひとりに風猷を聴て、但傾仰を増す、伏て惟みれば大王、天朝の命を

受けて日本の基を開き、突葉光を重ねて、本枝百世なり、武芸忝くも列国に当て、濫りに諸蕃を惣ぶ、高麗の旧居に復して、扶余の遺俗を有てり、但天崖路阻たり、海漠悠々たるを以て、音耗未だ通ぜず、吉凶問を絶つ、親仁の結援、庶くは前経に叶い、使を通じ隣を聘する、今日に始めんことを、謹んで寧遠將軍郎将高仁義、游將軍果毅都尉德周、別将舍航等二十四人を遣して、状を齎し、竝に貂の皮三百張を附して送り奉る、皮幣珍に非ず、還て口を掩うの誚を慚ず、主理限有り、枝胆未だ期せず、時に音徽を嗣いで、永く隣好を敦うせよと、措辞鄭重であり、また渤海が高句麗の後継をもって自認し、修交を求めてきたのは文意に明らかなところである。朝廷では高齊徳ら8人に正六位を授け、「当色の服」を下賜し、2月16日從六位下引田虫麻呂に「送渤海客使」を命じた。その一行が朝廷に出発の挨拶を行うのは、ようやく6月5日のことで、使節らの滞在は半年にも及ぶ永いものであった。

これよりさき4月16日、朝廷から齊徳ら8人に糸・帛・綾・綿を分に応じて与え、璽書を渤海郡王に致すとともに、信物を贈った。文にいう「天皇敬て渤海郡王に問う、啓を省て具に知んぬ、旧壤を恢復して、聿に曩好を修むることを、朕以て之を嘉みす、宜しく義を佩び仁を懷きて、有境を監撫し、滄溟隔つと雖ども、往來を斷たざるべし、便ち首領高齊徳等が還次に因て、書竝に信物綿帛一十五疋・綾一十疋・絁二十疋・絲一百紵・綿二百屯を付す、仍て送使を差して発遣、郷に還らしむ、漸く熱し、想う平安にして好からんことを」と。渤海の版図に旧高麗の領域が含まれたのはたしかである。しかしそれだからといって、渤海が高句麗の後継政権であるとみることとはできない。渤海郡王が高麗の旧居に復すと告げ、その高麗がかつて日本との間に結んだ故事に倣って修交を求めてきたのを、日本ではひとえに「曩好を修むる」ものと合点して、その意を「嘉みし」たようである。返書の文脈に相手方をみくびった感情の動きが、きわめて露骨にうかがわれる。この点は日本が唐に接した態度と、まことに対蹠的である。しかし渤海

では唐から冊封を与えられ、「列国に当て、諸蕃を惣ぶ」とまで自認していたのであるから、内心ではおそらく日本もまたその「列国」の一員ぐらいに考え、むしろ対等の立ち場で修交を求め、できれば経済上の利益を獲得しようとするところに、底意があったように推測される。彼我の認識と期待に、かなりの齟齬があったのは否みがたく、このため特に日本側の一部で忌諱と指弾を招くことにもなるのであった(『続日本紀』前篇、111—113頁)。

のち孝謙天皇の天平勝宝4(752)年9月に、国使慕施蒙以下75人の一行が越後の佐渡に漂着してくると、朝廷は左大臣坂上老人を現地に派して消息を問わせるのであるが、その案内で入京した一行は25日王の方物と、「渤海の王、日本照臨せる聖天の朝に言うす、使命を賜わらざること、已に十余歳を経たり」と、日本から使節のないことをうったえ、「是を以て慕施蒙等七十五人を遣わし、国の信物を齎らせ、闕庭に献じ奉る」との信書を呈するのであった。そのときに与えたる孝謙帝の返書にも、「天皇敬して渤海国の王に問う、朕寡徳を以て虔んで宝国を奉じ、黎民を亭毒して、八極に照臨す、王海外に僻居して、遠使入朝す、丹心の至明、深く嘉尚す可し、但し来啓を省るに臣の名を称すること無し、仍て高麗の旧記を尋ぬるに、国平の日、上表の文に云う、族は惟れ兄弟、義は則ち君臣なり、或は援兵を乞い、或は踐祚を賀す、朝聘の恒式を修め、忠款の懇誠を効すと、故に先朝其の貞節を善して、待つに殊恩を以てす、栄命の隆なること、日に新にして絶ゆること無し、想うに之れ知る所ならん云々」とある(同上218頁)。旧高句麗は日本の朝廷に対して、一言でいえば、宗主に対する礼節を尽したもので、わが朝廷もまたその至誠をみとめて礼遇するというのが修好の基調なのであった。ところが渤海国王は啓書に「臣の名」を称することをしておらぬと、少なからず詰問的な口調である。わが朝廷の渤海に対する態度、見る眼は基本的につねにかくのごとくであった(注2)。

(注2) いささかのちのことに属するが、宝龜2

(771)年の11月に国使耆万福が入京したとき、もたらした渤海の書に違礼の文があるとして、信物もろとも突き返すという一と幕があった。結局は耆万福が陳弁これ努め、詫びを入れることで円満に到着し、耆万福は任を終えて無事に帰国する運びになる。渤海王の啓にどのような無礼があったのか、王の書そのものの文面は見当たらないが、2月28日に光仁天皇から先方に宛てた書の内容から、およそのところが推測される。こうである、「渤海の王に書を賜いて^{のたまわ}く、天皇敬て高麗の国王に問う、朕体を継ぎ基を承けて区宇に臨駁す、徳沢を思覃して、蒼生を寧濟す、然れば則ち率土の浜、化同軌に輯る有りて、普天の下、恩殊隣を隔つる無し、高麗全盛なりし時、其の王高武、祖宗奔世、瀛表に介り居して、親しきこと兄弟の如く、義は君臣の若し、海に帆し山に梯して、朝貢相続く、季歳に逮んで、高氏淪亡す、爾りし自り以来音問寂絶しぬ、爰に神亀四年に泊んで、王の先考左金吾衛大將軍渤海郡王使を遣して来朝せしめ、始めて職貢を修す、先朝其の丹款を嘉みして、寵待優隆なり、王遺風を襲いで、前業を纂修す、誠を献じ職を述べて、家声を墜さず、今来書を省るに、^{にわか}頓に父道を改めて、日の下に官品姓名を注せず、書尾に^{むなし}虚く天孫の僭号を陳ぶ、遠く王の意を度るに、^{はか}豈是のごときもの有らんや、近く事務を慮るに、疑うべくんば錯誤に似たり、故に有司に仰せて、其の賓礼を停めしむ、但し使人耆万福等、深く前咎を悔いて、王に代わって申謝す、朕遠く来たれるを^{あわれ}矜んで、其の^{つまびらか}倭改を聴す、王此の意を悉にして、永く良図を念え、又高氏の世、兵乱休むこと無く、朝威を仮らんが為めに、彼れ兄弟を称す、方今大氏曾て事無し、故に妄りに舅甥を称すること、礼に於いて失せり、後歳の使、更に然る可からず、若し能く往を改めて自ら新たにせば、寔に^{これ}乃好を無窮に継がんのみ、春景漸く和す、想うに王佳ならん、今廻使に因って、指此して懷を示す、並びに物を贈ること別の如し」(『続日本書紀』後篇、401頁)。

文意から察すると、渤海王の信書には王の官位や姓名を欠いで、いたずらに「天孫」を僭号したり、日本の天皇と「舅甥」の関係を云為する言辞があったのであろう。唐の王道思想の影響

をつよく受け、「区宇に臨駁す」と自負する朝廷にとって、かくのごときは黙視しえないむしろ侮辱でしかなかった。渤海を飽くまでも地方的な高句麗の後継政権か、あるいはその復興程度に踏んでいた日本の朝廷では、かつて朝貢に余念のなかった高句麗を回顧し、渤海の態度をもって、突如「父道」を改めるゆえんなりと断じ、大いに自尊心を損じたものらしい。

問題は事務上の手ちがい、王の真意ではないということで、耆万福が詫びを入れて到着し、朝廷ではあらためて渤海の方物(内容は不明)を収めるとともに、2月2日耆千福に従三位、副使に正四位下、以下それぞれに爵禄を授けるとともに、国王には美濃^{あしぎぬ} 30疋・絹30疋・糸200絢・調綿300屯を贈り、かくて使節の一行が辞去したのは2月29日のことであった。

さて渤海の使節を送迎するために要する朝廷の経費は、直接間接に大いへんなものであった。かれらが着船するのは、地理上の関係から、多くの場合、出羽・加賀・能登・越前・出雲・伯耆等の日本海沿いの地方であって、中でも越前の松原(敦賀の近郊)に着くことが最も頻繁であって「松原館」と称して使節の休息所が設けられ、賄いの食料を保管するため「松原倉」の備えまでであった。勢いわが表玄関の太宰府を経由したのは、ほとんど稀れである。しかしなにぶんにも航海術の拙い時代であって、季節風や潮流に翻弄されがちで、容易に目的地に着くことができず、ようやく陸地に接近しても、空しく難破したり、あるいは漂流のあげく僻地に着岸して、蝦夷に襲われたりする例が、まことに少なからずあった。そのようなとき、朝廷の方で造船して、帰航の手配をするのが、これまた例だったのである。『類聚国国』元慶6(882)年10月29日の条に、「勅すらく、能登国をして、羽咋郡福良泊の山木を伐損することを禁ぜしむ、渤海客が北陸道岸に著する時、必らず還舶を此の山に造る、民の伐採に委ぬれば、或いは材無きを煩わん、故に予め大木を伐ることを禁ず云々」とある(後篇、373—74頁)。いかにも手のかかる厄介な使節の来往なのであった。わが朝廷はそこに先進国または宗主国としての矜持を、それ

なりに自覚していたようでもある。しかも右大臣藤原緒嗣があのように饗應するに至る一半の理由がまたそこにあったのは、あらためていうまでもない。

神亀4年に来朝した最初の使節から、すでにそこまでの配慮を与えたとはいわないが、あるときかれらが帰国の暇乞いをして2日後の『続日本紀』5年6月7日の条に、「水手已上惣て六十二人に、位を賜うこと差有り」とみえる。「送渤海客使」引田虫麻呂と、その随行者たちへの餞けだったのに、ほぼまちがいはなく、使節らもまた日本で仕立てた船に便乗したものと考えられる。因みに虫麻呂が渤海郡王の信物を携えて帰朝するのは、天平2(731)年の8月29日であった。

その虫麻呂が帰国してから8年後の天平11(739)年12月に、帰朝した遣唐使の判官平群広成(または広業)に同行して、第2回目の渤海使節が出羽国に着き、入京して王の啓に大虫皮(虎皮)と羆皮各7張・豹皮6張・人参30斤・蜜3斛を添えて進上する。広成は初め天平5(733)年、大使多治比広成に随行して入唐し、6(734)年10月、任を終えて帰国する途中の海上で遭難し、ついに四散した一行の生存者の1人であって、玄宗皇帝の配慮から、渤海を経由して帰国することになったものである。かれが唐から渤海に送られたとき、当の渤海でもいずれ日本に使節を派遣する用意があったため、広成を送りかたがた、大使胥要徳、副使己玢蒙らの一行を同行させることにした。ところが船出して間もなく、今度は渤海の船が激浪にさらわれて転覆し、大使胥要徳ら40人が溺死してしまった。天平10(738)年5月頃のことらしい。彼我ともに散々な苦勞をかさねつつ、結局副使の己玢蒙らが広成ともども出羽国に漂着したわけなのであった。出羽に到着したのは、実に天平11年の7月13日のことだという。かくて入京の使節を迎えた朝廷では、翌12(740)年の正月7日、副使雲麾將軍己玢蒙以下に、それぞれの位を授け、朝堂に宴を張って饗応するとともに、渤海郡王に例のごとく美濃絁30疋・絹30疋・糸150絢・

調綿300屯を贈り、また己玢蒙に美濃絁20疋・絹10疋・糸50絢・調綿200屯を、以下それぞれ身分に応じて施与し、別に殉難の大使胥要徳に従二位を追贈して、調布150端と庸布60端を贈することになる(『続日本紀』前篇、156—57頁)。

渤海が日本にもたらせる信物と、持ち帰る日本の信物と、両者の経済価値を比較、計量することはできない。しかし相手方の使節を頻繁に応接する日本側では、交換方物の外に、送迎や長期にわたる滞在中の手当てや随員らへの祝儀(これを禄という)から帰航の準備に至るまで、その失費が尋常でなかった。殊に使節団の規模が大きくなり、派遣が度々重なるのに伴って、それらの負担はいよいよ累増せざるをえない実情にあって、両国の利害はけっして相殺されるような関係でなかった。言葉をかえれば、渤海との交渉が頻繁になればなるだけ、それだけ日本側では負担が増大し、逆に渤海に対してそれだけの利益をもたらせたというもので、日本側の遣使が渤海のそれに比して半数そこそこに過ぎなかったのも、しよせんやむをえないところであった。辻善之助氏も「我国の絹類は渤海国に貴重品であって、その国王が大いに利益を得たものらしい」とみておられる(前掲書、228頁)。

では日本の絹が、どうして渤海国王に大なる利盛をもたらせたのか、それだけの需要が絹にあったからにはちがいないが、ただそれだけでは少なくとも社会経済史での説明にはならない。絹ばかりでなく絁や布や糸や綿などの繊維品が、ほとんどの場合の贈答品に選ばれ、あるいは派遣使臣らの手当てに用いられるのは(この点は遣唐使の場合にも同じである)、それらの繊維品に対する需要が、単なる消費目的(使用価値)としてよりも交換の目的(交換価値)に向けられ、等価物としての機能により役立つものがあつたからだと考えなければなるまい。ただしここではこの問題について、これ以上に及ばないことにする。

Ⅲ 修交の物質的限界

『延喜式』の定めによると、日本から派遣す

るいわゆる「入渤海使」に絁20疋・綿60屯・布40端を支給し、随員以下には「判官」に絁10疋・綿50屯・布30端、「録事」に絁6疋・綿40屯・布30端、「訳語・主神・医師・陰陽師」に各絁5疋・綿30屯・布16端、「史生・船師・射手・船工・施」に各絁3疋・綿20屯・布10端、「僊人・挾抄」に各絁2疋・綿10屯・布10端、「水手」に各絁1疋・綿4屯・布2端を、いずれも手当てに支給し、また渤海の使節が来朝するときは、「渤海王」に絹30疋・絁30疋・糸200絢・綿300屯を進物し、「大使」に絹10疋・絁20疋・糸50絢・綿100屯を、「副使」に絁20疋・糸40絢・綿70屯を、「判官」に各絁15疋・糸20絢・綿50屯を、「録事」に各絁10疋・綿30屯を、「訳語・史生・首領」に各絁5疋・綿20屯を支給することになっている（後篇、738頁。なお疋・端・絢・屯等の単位量目は、調や庸の「課口」、原則として成年男子に対する義務生産の数量から割り出したもので、生産に関連する重要な意義をもっているが、ここではその説明を省略して、別の機会にゆずることにする）。

『延喜式』は周知のように、藤原時平らが醍醐天皇の勅命から、弘仁・貞観の二式を集成して、延長5（927）年12月に撰上したものである。したがって渤海王や使節らに贈与する品目や数量のごときは、神亀以来の実情や慣例の結果にかかるのであろうが、大使や副使は各1人だったにしても、それ以下の随員ともなると構成人員が増加すればそれだけ、日本としては有形無形の失費が増大することを覚悟しなければならなかった（注3）。

（注3） 後代陽成天皇の元慶6（882）年11月に裴はい遜ていら105人の使節団が加賀国に到着したとき、朝廷では翌年の正月26日、「渤海国使を入京せしめる」ため、道筋の山城・近江・越前・加賀の各国に対して、官舎・道橋の修理や、「路辺の死骸」を埋めることを指令する一方、越前・能登・越中の3国には、「渤海の客を勞饗する」ため、酒・糒・魚・鳥にんにくなどの品物を、加賀国へ送り届けるよう下知している（『日本三代実録』後篇、533頁）。いつもこうだったとはいえないだろう。しかし日本側の負担といえば、直

接接待をする朝廷の失費ばかりでなく、関係地方の農民その他の庶民に、なにかと臨時の犠牲が強いられたことを忘れてはならない。『延喜式』が列挙するところは、従来の慣例を取捨選別し、あるいは適当に加減して、実情に応ずるところの正常な限度を示したのではないかと思われる。

すなわち渤海の立ち場からすれば、機会を捉え、好辞をつらねて使節を送り、あるいはその規模を拡大し、あるいはその度数を頻繁にすれば、それだけの反対給付が期待できるというものであった。

現に天平宝字2（758）年12月、渤海王大欽茂が、「承り聞く、日本に在つて八方を照臨する聖明皇帝、天宮に登遐すると、攀号感慕して、黙止すること能わず云々」と、前々年の天平勝宝8（756）年の5月に崩じた聖武天皇を追悼する表文に、「常貢の物」を添えて持たせた大使揚承慶らが入京した際、淳仁天皇は「勤誠の至り、深く嘉尚す」とばかり、大欽茂に書を与え、「時に随つて礼を変ずるは、聖哲の通規なり」と、絹40疋・美濃絁30疋・糸200絢・綿300屯、それに「特に爾の忠を嘉みして、更に優を加う」の意味から錦4疋・両面（表裏同じ紋様の錦）2疋・纈羅4疋・白羅10疋・彩帛40疋・白綿100帖を贈り、さらに「船の駕し去るもの無し、仍て単使を差して本蕃に送還せしむ」と、高元度を送渤海客使に任じ、帰還に至るまで万遍のない手配を講じているのであって、それらの経費が莫大だったのはいうまでもなからう。もっともこのときは去る天平勝宝4（752）年閏3月に発向した遣唐大使菓原清河の帰国を迎えるため、高元度が同時に「迎入唐大使」を命ぜられているのであって、その渡唐に渤海国王の援助を要請する意味合いが、一方にあるにはあった（『続日本紀』前篇、259—60頁）。

次いで宝亀7（776）年12月には、献可大夫史都蒙以下187人もの大勢が、今度はわが天皇の即位を賀し、他方で渤海王妃の喪を知らせるといふ触れ込みで派遣されてきている。ときの天皇といえば光仁帝で、その即位はすでに六年前

の宝亀元(770)年10月1日のことである。いかにも間のびした慶祝であったが、史都蒙が持参した王の信書に「国使壹万福帰えり来たるとき、承り聞く、聖皇新たに天下に臨することを、敬慶に勝えず云々」との語がある。けだし宝亀2(771)年の12月に来朝して、散々に油を絞られたかの壹万福が持ち帰った光仁天皇の書に、「朕体を継ぎ基を承けて、区宇に臨馭す」と記されていたそのことをいったのであろう。しかしそれにしても間合いがありすぎ、ことにかねて王妃の計を知らせるに至っては、吉凶などには頓着せず、ただ187人もの使節団を派遣する口実を、もっぱらそこに附会したとしか考えられない。かくて強引の遣使ではあったが、このときも日本の国土を目前にして暴風雨に遭い、「^{かじ}柁折れ、帆落ちて、漂没する者多く」、生存者わずかに46人という惨憺たる始末になり、朝廷ではひとまずこれを越前国加賀郡に收容して、「安置供給」することになる(同上、430頁)。

翌宝亀8(777)年2月、朝廷は生存者46人のうち30人の入京を認めた。接待の経費を節約するためであったろう。ところが史都蒙から生存者はすべてが一心同体、苦楽を共にしてきた、しかるに「今承る、十六人別に処置せられて、海岸に分ち留むと、譬えば猶お一身を割きて背を分ち、四体を失いて匍匐するがごとし、仰ぎ望むらくは、宸輝曲照して、同じく入朝を^{ゆるし}聴たまえ」と懇請して、全員の入京が承認されることになる。

4月27日、天皇軒に臨んで大使史都蒙に正三位を授け、大判官以下にもそれぞれ授位の沙汰があり、5月23日一行の帰国に際しては、大学少允正六位上高麗殿継を送使に命じ、国王並びに史都蒙以下に賜禄のことがあった。このときにも難破して、「船の駕し去る無し……故に舟を造り使を差して、送って本郷に至らしむ」となし、かつ渤海王に絹50疋・纒50疋・糸200絢・綿300屯を贈ることにした。これに対してなお史都蒙から要請があり、朝廷はさらに黄金小100両・水銀大100両・金漆1缶・漆1缶・^{つばき}海石榴油1缶・水精の念珠4貫・檳榔の扇10枚等の品

物を追加するばかりでなく、王妃の喪を弔して絹20疋・纒20疋・綿200屯の搬出を余儀なくされるのであった(同上、434—35頁)。

日本朝廷の面目にかけた大盤振る舞いの感が深いが、修交の実情がかくのごとくであり、またいったん来朝すれば、半年内外にもわたる永逗留の一行だったのであるから、いかに修聘とはいえ、その回数や人数に制限を設けようとする意向が、特に日本側で動いてくるのは、さげがたいところであった。

『類聚国史』によると、桓武天皇延暦14(795)年11月に、渤海の国使呂定琳ら68人が出羽国の蝦夷地に漂着して、例のごとくに略奪せられ、「人物散亡」して、越後国に收容される。そのとき定琳がもたらせた国王嵩璘の書に対し、桓武帝は返書して「勝宝以前、^(琳)数度の啓、頗る体制を存し、詞義観る可し、今定琳上る所の啓を検するに、首尾^{たが}慥かならず、既に旧儀に違^{たが}う、朕^{いよ}以らく、修聘の道、礼敬を先と為すと、苟も斯れに^{そむ}乖かば、何ぞ来往することを^{いずくん}須んや云々」と、修交の無意味なゆえんを指摘した。翌15(796)年の冬10月2日、あたかも遣渤海使御長広岳らが、また嵩璘の書をえて帰朝する。書はすなわち定琳らの遭難に寄せた朝廷の救恤を謝するとともに、ひたすら日本朝廷の「盛化を慕うと雖ども」、修聘には海路の困難や蝦夷の危険が伴う、^(往)「幸に来住を許されんか、則ち送使の数二十を過ぎず、茲れを以て限と為し、式としては永規に^た作さん、其れ隔年の多少は、任ねて彼の裁定に^ま聴つ、裁定の使、来秋に望み、許すに往期を以てすれば、則ち徳隣常に在らん云々」と、その意向を伝えるのであった。文意からすると、国使の派遣は以後その員数、20人以内をもって定式とし、派遣の週期(回数)は日本側の裁定するところにしたがうが、できればまず来秋を期して裁定の使を迎え、そのときをまた往期(渤海側の)とすることをみとめられたいと希望したもののようである。人数について、日本から異議を通告したらしい形跡はないが、渤海側が日本での不評かなにかを風聞して、反省したのかも知れぬ。「隔年」云々のことは、これは明

らかに日本の朝廷が先きに「何ぞ来往することを須んや」と突き放した通告に対する、妥協案の提示であった。

この提案に対し、わが朝廷は延暦17(798)年5月に出発した遣渤海使内蔵賀茂麻呂をして、「隔年の裁を請い、永歳このゆえにの則と作さんことを庶おそう、丹欸著しき所、深く嘉みする有り」、「所以、彼の請う所に依って、其の往来を許す」、「使人の数は、多少を限ること勿れ、但し巨海の際無きを顧おもうに、一葦の航す可きに非ず、驚風踊浪、動やもすれば患害に罹る、若し毎年を以て期と為さば、艱虞がた測りかなじ、間六歳を以て、遠近宜しきに合う」との書を携行させて、人数についてはかえって寛容の度を示し、ただ海路の危険な実情から、往来の週期はこれを六年目毎とするのが適当であると通告した。しかし渤海からは、その年の12月に折り返えし国使大昌泰の一行が来朝して、「六年を以て限と為すこと、竊おそに其の遅きを憚る、請らくは更に嘉たま図を賔ともい、並に通鑑を廻らせ、其の期限を促し、傍素懷かたがたに合えん」とうったえ、「又書中許す所、多少を限らずと雖ども、聊か使者の情に依って、行人の数を省略す」と、日本の意向とはやや喰いちがった希望を伝えるのであった。翌18(799)年4月、わが朝廷は大昌泰らの帰国に当たって、「夫れ制するに六載を以てするは、本と路の難たるをもってなり、彼れ此の如きを辞せざるにおいては、豈に遅速を論ぜんや、宜しく其の修聘の使、年限を勞すること勿るべし」と返書して、全面的に渤海の希望を容れることになる。しかし渤海側でも種々実情をとり入れて熟慮したのであろう、結論的には「遂に半紀を以て限と為す」と、すなわち六年一期というところに一致したようである(『類聚国史』後篇, 350—52頁)。

渤海国使の来朝は、しかしながら、その後必ずしも六年一期にかぎらず、実際にはかなり接近して行われ、年期や人数について彼我の間に見解の相違があったりして、種々折衝をかさねることもなるが、日本側がいつも消極的なにくらべ、渤海の態度が常に積極的なのが、ほぼ一貫してかわらぬ両国間の交渉の顛末なので

あった。『類聚国史』や『日本三代実録』などによると、来朝の使節団のごときも天長元(824)年あたりから、1回の人数がおおむね105人という線に、むしろ増加して固まってきたようである(弘仁14年11月に101人、天長元年に103人であるが、それ以後はほとんどの例が105人である)。それが日本側の要請によるのか、それとも渤海側の都合からか詳かでない。しかし無闇に大勢いの使節団は彼我ともにたえられぬのは、過去の経緯が語っており、双方の経済事情や地理的条件からみても、おのずからこの線あたりが派遣と受容の限界だったものとみられる。藤原緒嗣が痛烈に奏言したのは、あたかもこの年代の頃であった。

IV 原始と文明の接触

天平11(739)年12月に、渤海の使節と一緒に帰国した遣唐使の判官平群広成が、玄宗皇帝の好意で唐から渤海に送られたことは、前に一言した。衛藤利夫氏の『韃靼』によると、その道筋がつまりは渤海と唐との交通路であって、まず唐の都長安から陸路を山東の登州に出で、そこから船に乗って渤海湾を渡り、多くは遼東半島の旅順に立ち寄って、東南に大孤山沖をまわり、鴨緑江の河口に出て溯江を始め、上流の長白山の麓でいったん船をすて、山越えて牡丹江に入り、流れに沿うて東京城トシキョウに至ったということである(366—67頁)。

これに対し渤海から日本への通路はどこにあったのか、やはり衛藤氏の説に、「使節派遣の策源地は、云ふ迄もなく王城、中央政府の在った牡丹江流域の東京城。船を何処から出したかと言ふことは問題であるが、諸種の事情や史実を総合して考究すると、今日の間島省、図們江の河口から少し北寄りの、今はソ聯領になってゐるが、ポセイド湾と言ふところがある、恐らくそこではなかったかと思はれる。時によると、日本から、船は筑紫の太宰府に着けて呉れと言ふ要求があったりしてゐるので、モット南へ寄った朝鮮の咸鏡北道、今日の清津から少し下った鏡城あたりから船出したことも、偶にはあっ

たらしい」とある(同上書、374—75頁)。これがまた渤海使節の帰路であり、わが遣渤海使や送渤海客使の往復する主要の通路だったのは、いうまでもなからう。また平群広成が唐からの帰途に渤海を経由し、天平宝字2(758)年に来朝した揚承慶らを送還する送渤海客使高元度が、同時に遣唐使藤原清河を迎える迎入唐大使を命ぜられたことなどからすると、渤海がときには日唐交通の中継地をなしたものと考えられる。

もっともわが遣唐使は「西^{にし}海^{のうみのつかい}使」とも呼ばれたように、奈良朝の時代には夜久(屋久)・奄美(大島)等のいわゆる南島を経て、東支那海を西北進する航路をえらび、平安時代になると南島を経由することなく、直接支那海を横断して渡航し、いずれの時代にも唐の明州(寧波)に上陸するのが順路であった。したがって唐との交通に関するかぎり、渤海を経由するのは、むしろ例外中の例外といってよい。しかしそれ以前、舒明朝から天智朝(629—71年)の頃までは、むしろ朝鮮半島の西岸に沿って北上し、渤海湾を横に切って大陸に達したといわれているのであって(木宮泰彦『日支交通史』上巻、141—51頁)、朝鮮半島を経由する交通路が、時代的により早く開かれていたことは、他の史実にかえりみるまでもなく、当然に理解される。

唐や渤海と上代日本との間に結ばれた修交の関係が、信物とか朝貢とかいずれの形式をとるにもせよ、実質的には相互の物々交換であり、さらにいうならば、宮廷中心の官営交易であったのは、今さら贅言するまでもない、歴史上の常識である。換言すれば、唐や渤海と日本の間に存在した交通路は、とりもなおさず、彼我の間で交換される物資の流通経路に外ならなかったのである。先進国唐の文化が上代の日本、なにかんづく天平文化の造形に直接寄与したのは、燦然として歴史の実証するところであるが、ここではそのことが問題なのではない。それよりも、日本が唐に対して後進国であったそのように、日本に対して後進国だったそのような渤海との交渉を通じて、なにか歴史の原型といったような関係を模索しようところみているので

ある。大陸の隋や唐と大和朝廷の外交的な交渉が開始される以前から、北九州連合と漢や魏の間に交通路が開かれていたあたかもそのように、渤海が成立した地方と日本列島との間に、朝鮮半島を縦断してか、あるいは半島の西か東かの海岸沿いにか、歴史以前の原始的な通路ができたと考えても、たとえば神功皇后の三韓征伐の伝説や、その前後に比定される半島諸国との交渉、あるいはかの楽浪・帶方から日本に移住してきた漢民族の故事来歴などにかえりみて、そのゆえなしとせぬ。少なくとも渤海と日本の交通路が、彼我両国の交渉にかかわりなく、それ以前からの人の認識に生きて存在したであろうことは、疑いのないところと考える。

では渤海の地にかつて居住したのは、いかなる民族なり種族なりであったろうか、問題をあらためてこう提起してみると、登場してくるのは、やはりかの肅慎より外にないのである。シロコゴロフ(S. M. Shirokogoroff)の研究によると、日本でいう「みしはせ」は、もともとスシエン Sushen(肅慎)と呼ばれた満洲族であって、かれらは日本海、黒竜江及び長白山によって囲まれた松花江の流域地方を占拠し(すなわちのちの渤海の領域)、2,000年の間に挹婁(Y-lou)、勿吉(Wutsi)靺鞨(モホ Moxo)、女真から満洲にと変化してきたものであった(拙稿「北方民族との接触・交渉」参照)。そして大陸東北部の原住民が概してツングース族であり、肅慎もまたその1種族であるとするのが(『日本書紀』に伝えるそれは姑く別にしても)、今までの研究史が示す大方の見解なのである。

蕭一山の『清代通史』(大正12年12月、上海)の説にしたがうと、いわゆる通古斯族は索倫・達斡爾・鄂倫春・満琿・費牙喀・奇軌爾・呼爾喀等の諸種族から成り、中国ではこれをその生活習性や風俗の差異から「森林通古斯」と「野原通古斯」の2種族に大別し、貨物を運搬するのに前者が人力を用いるのに対し、後者は獣力を使う習慣があるところから、その使用する役畜の種類によって、これをさらに「使犬部・使鹿部・使馬部」の3部族に分け、また別に「赫哲」

と呼ばれる種族(ゴールド族)がいて、衣服に主として魚皮を用いるところから、特に「魚皮部」と称して区別し、都合2種族、4部族に区別するのであった(上巻, 38—40頁)。総じて狩猟民族のかれらは、「以射獵為業、所射者為野雞・飛竜・沙雞・樹雞・麋・鹿・野猪・熊・狐・狼・虎・水獺・豹・灰鼠等」, 「而常獵之獸、則麋・鹿・狐・灰鼠四種也」といい、衣服にはすべて麋の毛皮を用い、主食はその肉で自給し、これに米・麵を副え、それらの副食物や酒・油・塩・布・鎗・弾等の調味料とか生産資財などは、獵するところの獣皮や獣肉をもって、他の種族と「誼達」(けだし沈黙易交の意味か)してこれを賄い、その住所は「遷移無定、逐鳥獸而居、大都在有山有河之处、此处鳥獸蓋、即移他所」, 鳥獸を追って転々定まらず、ただだいたいにおいて「冬季多住於山之陽、夏季多住河之浜」というのがかれらの生活習性であった(中巻, 525—26頁)。

もっとも同じツングース族であっても魚皮族と呼ばれるゴールド族だけは、ウスリー(烏蘇里)江などの川筋に多く住んでいて、もっぱら川魚を「不仮烹調」して生食し、またかれら(にかぎらなからうが)暦日はなく、「以魚来一次一年焉」といった自然生活の繰り返えしに終始するのであった(同上書, 527頁)。プザン・ウィールの『東亜に於ける紛争の進展』(B. L. Puthan Weal; *The Coming Struggle in Eastern Aisia*, London, 1908)は、主として19世紀前半に、極東方面に進出する帝政ロシアと清国との間に惹起した紛争に関する研究書であるが、その中にウスリー江を下って、流域地帯の調査を行ったロシアの科学者フィニウコフ(Viniukof)の1858年の報告書を引用して、それらの地帯におけるツングース(ゴールド)族の生活状態を紹介している。すなわちウスリー江には多くの淡水亀が棲息していて、江岸の砂地に産みつける無数の卵が、所在のゴールド族に好個の食餌を供し、また江の浅瀬では途方もなく大量の鯉が水面に跳ね、しばしば舟の中に飛び込む有様であって、ゴールド族の主食は、これらの豊富な淡水資源でよく供給さ

れていたという。ただしかれらを魚皮族と呼んだのは、支那人が名づけて Yu-pi-da-tzi すなわち Fish-skins-Strenger と称したのに起因するもので、かれらは通常魚皮ではなく、粗い木綿の衣服を纏うているのであって、これを魚皮族と呼ぶのには、実際になんの意味もなかった(pp. 89—90)。

ところでウラジオストックからニコライエフスクに至る沿海州地方や、黒竜江の右岸方面のゴールド族やギリヤーク族などは、原始の密林地帯を、生存のためつねに自然と戦いながら、小人数で貂や銀狐などの狩猟にいそしみ、毎年猟期の初めに支那の商人から生活必需品や衣服を掛けで買い受けて、獲物の最も貴重な部分をその支払いに当てているのであった (*ibid.*, p. 87)。ゴールド族が魚皮族の名にふさわしからぬ木綿の衣服を身にまとうようになったのは、いつ頃からであったのか、その時代を推定するのはむろん不可能であるが、かれらと支那商人との出会い、つまり原始と文明の接触が、ある国家の主権がそれらの地帯に伸張するよりも、はるかなる以前の時点にあったことは、想像にかたくない。でなければ商人の自由な活動など、ありえなかったからである。

1585年(わが天正13年で、中国の万暦年代)ローマで刊行されたフワソ・ゴンサーレス・デ・メンドーサ(Juan Gonzales de Mendoza)の『シナ大王国誌』(長南実訳・矢沢利彦訳注、岩波『大航海時代叢書』VI所収)に、その国の産物として、「上等の裏地」の毛皮、「とくに貂^{マルタ}、黒貂^{セベリーナ}の毛皮」が挙げられている(72頁)。それらの毛皮が、大陸東北地帯の狩猟民族によって生産される遠い歴史の伝承だったのは、いうまでもなからう。それとは逆に「この王国の最大の交易品」だった「びろうど・^{テルシオプロ}緞子・^{ダマスコ}縐子・^{ラーン}琥珀織」のごとき特産の絹織物が(69頁)、よしんば古手の品物だったにもせよ、貴重な毛皮の代替品として、東北民族のどこかに運ばれたであろうことが、たとえば清朝時代に、黒竜江畔で盛況をみせた「貢皮領賞」の事績などにかんがみて(拙著『北涯の悲劇』, 22頁参照)、推測されるのである。さらに

さかのぼるならば、かの唐時代に展開したいわゆる西域各地との旺盛な経済的交渉の事実をみがせない。7世紀の中葉、西域経営の基礎を確立した唐の都長安には、シルク・ロードを敦煌または楼蘭にとって螺集する「朱髯緑眼」のイラン商人が、ラクダの背にゆられて、夥しい西域の珍貨を運び、あこがれの絹や錦に積みかえて去り往くのであった(長沢和俊『敦煌』121—31頁)。西域のそれらの珍貨がやがて日本にまでもたらされ、現在正倉院に保存されているがごとき、むしろ驚異にたえる現実であった(林良一『シルクロード』, 152—53頁)。しかし驚異といえ、古代人が抱いた、文字通り千里を遠しとせぬ異境への憧憬と万難を冒し、死を賭しても目的にひたむきなあの不屈の生活意欲こそ、まことに驚嘆すべきところであろう。そこでかりに、さらに東行して、線を東方に引き伸ばし、これと北方民族の生活圏とを絡ぎとめる冒険商人かなにかの往来ルートを考えることはできないのであろうか、もちろんそこにはイランの商人たちを誘いよせるなんらの魅力もなかったにちがいないが、その地続きのどこかには、唐の文化にあこがれる渤海の国土があり、またどこかには、古く貂や黒貂を追う遊獵民族の世界があったはずである。

V 結びに代えて

平安時代の末期、右京大夫藤原明衡の作と伝えられる『新猿楽記』(新校「群書類従」第六巻所収)に、「商人の主領」八郎真人と称する人物の生活や業態が描かれている(原漢文)。時代の商人氣質や営業範囲などを、この人物に仮託して誇張したものであろう。人物を描写していう、「八郎真人は商人の主領なり、利を重んじて妻子を知らず、身を念うて他人を顧みず、一を持ちて万と成し、^{つち}埴を搏つて金と成す、言を以て他人を誑き、^{あざむ}謀を以て人目を抜く一物なり、東は俘囚の地(奥羽地方をいう——引用者)に^{いた}簒り、^(喜界島カ)西は貴賀の島に渡り、交易の物、売買の種^えて数うべからず云々」と。その売買する商品には、「唐物」(舶来品)と「本朝の物」(国産品)に

分けて、およそありとあらゆる種類の品目が列挙されている(487頁)。平安朝の末ともなれば、唐も渤海もすでに滅び去り、日本では律令体制が崩壊して荘園の最盛期であった。官営の対外交易は私企業の貿易にその座をゆずり、社会の生産は調や庸の負担から離脱して、いちじるしく商品化の方向に進んでいた。唐や渤海との交易は、帰するところ、日本経済がそこへ発展するまでの前段階だったのであり、したがって律令体制下の経済のどこに、そのような発展の可能性が約束されていたのか、それはそれなりに社会経済史の研究課題でなければならないが、同じ論理から、唐や渤海との間に成立した交易関係の歴史的 premise にもまた当然にそれだけの、原始的な先行形態の存在したことが想定されてよろしいのであろう。といってここに結論的な解釈を導き出すなんらの根拠も持ち合わせないが、ただ想起されるのは、渤海国の住民に編入されたとみられるかの肅慎人の前歴史的な存在でなければならない。むしろそれはひとつの可能性としてである。

そのような可能性を追求するに足るは、渤海との交易そのことについて、余りにも多く触れすぎたきらいがある。これは律令体制下の日本経済が、発展方向を流通面にたどる契機として、対外交易の結果した刺激を知ろうとする別の意図からである。それにも拘わらず、対外交易としてより古く、より代表的な先進国唐との関係を当面疎外したのは、渤海との交渉を通じて、むしろその後進的な国柄ないしは民族性を索出して、そこにいわば歴史以前の対外的な経済関係の由来するところを看究めようと志向したからである。

(追記) 本稿は現在取りまとめにかかっているある総合的な労作の一部分を、編集委員会の要請から、割いてここに登載することにした。いたずらに間口が広くて、焦点が定かでないことを自省している。しばらく諒とされたい。

なお本文中に引用の六国史その他の古典は、黒板勝美博士の新訂増補『国史大系』による。